

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

| 学位申請者 | 杉浦 貴代子 【人間発達科学専攻 平成17年度生】 (平成25年9月30日 単位修得退学) | 要 旨 |
|-------|---|--|
| 論文題目 | フィリピンにおける幼児への心理臨床的支援に関する研究 - 就学前教育支援プログラムの構築を通して | <p>本研究は、フィリピン共和国の都市部にある一貧困地区をフィールドに、草の根の支援が可能な、小規模就学前教育支援に関する実践研究である。この分野の国際支援は、大規模で画一的な支援方略は馴染まず、草の根の支援の果たす役割が大きい。具体的な支援の方略やその効果について研究が進むことが期待される。本研究は、心理学的観点から特に情緒的なケアが加味された支援プログラムが構築されている。</p> <p>本研究から得られた主要な知見と意義は、次の3点である。</p> <p>第一に、子どもの発達状況を発達検査や家庭訪問調査などを行いながら丁寧に把握して、発達のニーズに即した適合性の高い教育プログラムを構築したことである。特に遊びや教師の応答的関わり、親の心理教育を重視する心理的ケアの視点を持ったプログラムを現地のカウンターパートと作り上げる過程が詳細に描かれ、他の実践に応用可能な知見が多く見いだされた。</p> <p>第二に、このプログラムを経験した子どもを小学高学年まで追跡し、統制群との比較によって、学力と情緒的問題の双方から子どもの学校適応の状況を検討し、実践の中長期的効果を確認したことである。先行研究には、こうした教育プログラムの終了直後の効果測定は多くあるが、その後の効果の持続性を確かめたものは少ない。特にプログラムの経験群に、情緒的な問題が少なかったことは、就学前の心理教育的関わりと親教育の重要性が示唆された。</p> <p>第三に、このような実践の持続可能性について検討したことである。経済的制約も大きな支援環境の中で、単に新しい技術や知識を提供するだけでは、現地教師の離職率を改善することは困難である。特に貧困の連鎖から未だ抜け出せない自分の将来への焦り、幼少期の傷つきなど、教師自身の抱える心理的困難は大きく、教師自身の成長ややりがいを見いだせる支援のあり方が提起された。</p> <p>本論文は、国際協力において関心の高い、就学前教育支援において、NGO等が、きめの細かい支援を実現する上で有用な知見を多く見いだしている。また、臨床心理学において、臨床心理学的地域援助に関するあらたな研究分野を開拓する可能性が示されていると言える。</p> |
| 審査委員 | (主査) 准教授 青木 紀久代 | |
| | 准教授 伊藤 亜矢子 | |
| | 教授 浜野 隆 | |
| | 教授 篁 倫子 | |
| | 教授 藤崎 宏子 | |